

アレキシス・カレル（『人間この未知なるもの』の著者）の生涯

上智大学名誉教授

渡部 昇一

医学界に全く素人の私がカレルについて話すのもおこがましいことではありますが、私が大学の時に望月光という神父から倫理学を習いました。労働の倫理学とか、肉体の倫理学というのもありました。

色々ありましたが、学期末になりましたら、先生が「私の講義は全部忘れてもいいから」とアレキシス・カレルの当時出ていた『人間—この未知なるもの』という本だけ読めばもういいというようなことを言われました。そこで、神田にいて古本屋で買ったわけです。そうして読みはじめましたら、試験なんかあっちへいけという感じになりました。それから、その英語の本を買ったりしてその年の春休みはカレルともう一人読んで、二冊ぐらいで過ごした記憶があります。

カレルで何が印象に残ったかといいますと、物理学はどんどん発達しましたがけれども肝心の人間についてはほとんどわからないという立場から、ノーベル賞を受賞した大学者が書いているということです。

カレルとはどういう人であったかといいますと、明治6年頃、フランスはリヨンの近くで生まれて若い頃医学に携わっていました。それを少し遡る1858年から、フランスではルルドの奇跡というのがありました。スペインとの境にある村の農家の娘、ベルナデッタ・スビルーのところへマリア様が現われました。マリアがここを掘れというのをその通りにしたら、水が出てきました。その水に触れますと、難病奇病がたちどころに治り、大変な奇跡という事で大騒ぎになったわけです。それで医者であるカレルも行って調べたわけです。

当時フランスは第三共和制憲法下で、コンブによる完全なる無神論的・反カトリック教會的政府でございまして、神父や修道女は教育界に足を踏み込んではいけないというようなとんでもない厳しい政教分離の時代だったのです。その最も唯物論的なフランスですから、ルルドに来る人たちも当然無知な連中だとカレルは思っただけで出かけていったのです。ところが、自分の目の前で病気が治るのです。その病気が目に見えない病気ならば、つまり精神的に気持ちが変わったので治ったともいえませんが、カレルが見て器質的な、オーガニックな病気で完全に身体の一部がこわれているような病気、たとえば肺病で肺がだめになっている、それが何日もかからないで数秒・数分で治るというケースをいくつもみます。

それでその報告書を書きますが、当時のフランスの医学界は非寛容でしてフランスにいられなくなりましてカナダに行きました。カナダにいるうちに、丁度フレクスナーがロックフェラー研究所をたてて、そこに招かれました。このフレクスナーは、野口英世も育てた人です。非常に人を育てる能力がある人のようです。カレルもそこで非常に気持ちの良い状況で研究しまして、1912年に血管縫合と体細胞を長く生かす方法でノーベル生理学医学賞を受賞します。

彼は一種の天才でして、手が非常に器用で手術する時も二本の指で糸が結べたという伝記もあります。

血管縫合と彼独特の理論で、体液、いわゆるmediumさえあれば体細胞は無限に生きるということを立てようとしたわけです。実際、その年に彼は半分解りかかったニワトリの卵の胎児の心臓を

取り出し、理想的な環境のmediumをつくりましてそこに置きました。これは、彼が死んでからもずっと生きていました。明治年間にはじめまして、死んだのは研究所が活動をやめた1939年（昭和14年）です。27年間その心臓から切り取った細胞が生きていたのです。体液さえちゃんと与えていれば、その期間は死なないという理論です。ノーベル賞医学者として第一級であり、第一次世界大戦当時ロックフェラー研究所にいましたが、愛国者でもありますから、その地位を捨ててフランスに行き、戦場の病院で治療にあたりました。そのとき、イギリス人のデイキンという人と画期的な消毒薬を発明いたしました。

それから、ロックフェラー研究所に戻りますが、ずっとヨーロッパとアメリカの状況をみていて、人間の医学、あるいは人間に対する人間の知識がなくなっていることに気づき、1935年（昭和10年）頃になりまして『人間—この未知なるもの』を書いたわけです。当然世界の超ベストセラーになり何百万冊も売れました。4年後に少し手を入れた改訂版を出しました。それを見ましたら、「本書は古くなるにつれてますます時宜を得たものになるという逆説的運命を持っている」というパラドックスを言っています。ここに書かれている事は勿論医学です。彼はこうっています。人間がどんどんだめになってくる、それは人間が人間を知らないからである。ここに書かれている事どの一行の為にも、優れた学者が一生かかった結論であるというようなことも言っています。だから、自分は人間を知るために必要なものだけを集めた、というのです。ですから、記憶に残るものがいっぱいあります。

たとえば、私は今年で73歳になりますが、私が死ねばわずか数時間後には腐るわけです。それから、私の足はもう70年以上使っているわけです。鋼鉄の靴を履いたとしても70年履いていればもう底が抜けているはずですが、私の足の皮は厚くなりこそすれ減りません。これはなんであるかということも書かれています。それからいかに精神的なこと、たとえば努力とかが大切かかいてあります。適応能力というのがあります。人間、適応能力をつかわないとどんどんだめになるという事も述べています。これは、青年には非常にいい本なので、自分が教師になってからは読書の相談をうけますと学生たちに必ずカレルをすすめていました。ところが、この本は手に入らない事がわかりました。

そこで、あの本は非常にいいのだけれども、どこも出版しないのならばだしたらどうかと三笠書房の社長にすすめたところ、彼の出版社がフランス大使館に行って版權の所在を確かめました。そうしましたら、所在がないのです。これはどういうことかと思って調べてみたら、カレルは第二次大戦のときもフランスの軍事病院で傷病兵の治療にあたっていました。しかし、フランスはあっさり負けてしまいました。負けた理由もカレルによれば自分の学説をフランス人は守らなかったから弱くなっているというわけです。あのナポレオンのときのル・グラン・ダルメみたいな軍隊はどこにいったのか。

完全にフランスの食物だとか習慣が、民族を墮落させ弱くさせたという洞察をもったわけです。それで、当時すぐにドイツが占領しましたから、占領下の政権としてヴィシーにペタン元帥が政府を作ったわけですが、その政府に頼んで研究所を作ってもらって、どうしたらより優れた、より丈夫な、知力的にも体力的にもすぐれた人間ができるかという総合的な研究をする研究所を作ってもらったわけです。

彼は戦争が終わる前に亡くなりました。ところが敗戦後、フランスはヴィシー政権に関係あった人々を徹底的に追放し追及したのです。ペタン元帥は死刑を宣告されました。それでカレルの親族たちもどこかに消えてしまいました。殺されたとは思いませんが逃げて身を隠したのだと思います。

だから、この世界的超ベストセラーの関係者はどこにもいないわけです。フランスは敗戦後、コロレイトー、つまりナチスと共存した人を、自分たちが負けた腹いせだかわかりませんが徹底的に迫害しました。カレルは戦争のたびに戻ってきて、傷病兵を手当てしているわけですから、間違いなく愛国者であり、ペタン元帥のヴィシー政権に頼んで作ってもらった研究所も間違いなくフランス人および人類そのものの質を向上するための研究だったのですが、そのヴィシー政権と関係あったということで消えてしまいます。

ところが、今から47,8年前、1955年頃に私はドイツに留学しておったのですが、カレルの本がいっぱい出ているのです。日記まで出ています。それで、大学時代に『人間—この未知なるもの』を読んだものですから、日記まで読みまして、彼のいうことは本当に文明の本質を突いていると思いました。

例えば、西原先生がおっしゃった様に人間は宇宙の中にいるわけですが、宇宙と人間の接触点は皮膚と腸と肺と断言しております。そこで、人間が生命活動をやる場合、たとえば、老廃物を捨てるということだけ考えましても、人間という体を腐らせないで、体液、いわゆるmediumにつけておくとすれば、人間には20万リットルの体液が必要です。でなければ、すぐ腐るそうです。カレルは、ニワトリの心臓を何十年間も生かした人ですから、体液の比率がよくわかります。人間というのは、20万リットルも、必要な体液をわずか十数リットルで全部やっているということもよく書いています。それから、もっと驚くべき事は、彼は精神の世界に触れているのです。というのは、医学生から本当の医者、医学哲学まで及んだカレルの第二の出発点になったのは、ルルドの奇跡という普通の人から見れば迷信に過ぎない現象が一生頭から離れなかったことなのです。彼は完全に自然科学者として信用できる資料のみから、あるいは自分が実際に観察したことから、祈りによって瞬時によって治ることがある、器官的に崩れておってほかのいかなる説明をもできないような治り方をすることがあると書いております。これは信仰です。ところが、もっとすごいのは、ずっと離れたところにいた人が、この人の為に祈られているのを知らないのに突如治ることがあるということです。

カレルは神様とかは持ち出しませんが、そういう不思議な事も述べたのです。聖職者、神父、修道女には、大変な支えです。私のいた上智大学や白百合女子大学には、沢山の神父、修道女がいてこれを読まない人はいない。丁度私が、学生の頃に日本のイエズス会総管区長にアルーベという神父様がありました。この人はスペインでは医学を修めた方でした。この人もルルドにいったら目の前で医学者としては絶対説明できないことが数秒で起こるのを見て神父になったという人でした。この本が流行ったせいでもありましたし、ほかの原因もあったでしょうけれども、第二次大戦後のアメリカは修道院に収容できないくらい神父・修道女になる志願者が増えたといわれております。それが、この本によるのが大きいのです。おかしいのは、カレルは明らかに純粋なる自然科学者、医学者として人間を見ているのですが、理由のわからない精神現象もあるものですから、それを無視しなかったのです。ついでに書いておきますと、この本の旧訳本は今手に入りませんので、私が新訳を出しております。

人間は進化して、宗教が生じたとしても、そういう祈りが働くような世界、そのような精神とか靈魂とかいわれた世界がなければ、宗教なんて意味ないわけです。生命の発生、そして単細胞の生物からだんだん発達して、脊椎を持つ哺乳類となって、さらに人間になったとすれば人間と猿との間になんか差がなければ「ならない」と思うのです。「ならない」というのはおかしいのですがあるはずだと思うのです。

それで、私の専門は語学ですが、進化論には大変興味を持ちました。というのは、ガリレオやコペ

ルニクスについては、少なくともカトリック教会は完全に両立する理屈を見つけているんです。しかし進化論はまだみつけないと思うのです。猿と人間が本質的に違わなければ、教会なんて無意味です。

人間と猿との違い、そこに進化論はどうせまっているかということにずっと興味がありました。このパンフレットみたいなものは、リンネ学会のトランズアクションの1858年のものです。ダーウィンの『種の起源』の一年前です。これはウォレスがテルナーデという今のインドネシアの激戦地でありましたハルメフラ島のあたり、あの辺の島にいた頃、熱病にかかっている時に、進化の原理について思いつきます。それで、日ごろ尊敬していたビーグル号航海記の著者ダーウィンに長い論文を送りました。ダーウィンは膨大な資料をもっていただけですけども、進化の原理がつかめないうちにおったわけです。ところが無名の青年がボルネオの近くから論文を送ってよこしたわけです。これは、種が変種をつくる傾向について、また種と変種が自然淘汰の法則によって永続する事について、というもう序文から最後まで完結した論文を書いているのです。これをみてダーウィンは驚きます。またダーウィンの友人で長くからの知り合いのチャールズ・ライエル、ウィリアム・フッカー、そういう人たちが「ダーウィンが今までやってきたのに結局ダーウィンがまだ進化論を発表しないうちに、これを出すのは気の毒だ」という事でダーウィンとの共同発表という形にしてやろうということになったのです。

これについては今から10年ほど前に、ブラックマンと言う人が、『Delicate Arrangement』（微妙なる調整）という題で出しまして、その辺のからくりを全部暴露しました。日本では『ダーウィンに殺された男』という題で訳が出たかとおもいます。これをみますと、ウォレスの進化論は本当に本物の進化論です。自然淘汰でどうしてできるかちゃんと書いています。ダーウィンの方はわずか3ページ、研究からのアブストラクトというわけで、理論はぜんぜんない。自分の研究からとりあえず三ページ拾っただけで、それを共同発表という形で出します。発表された時は、世間の注目をひきませんでしたので、どうということはありませんでした。一年後に、ダーウィンはあわててこのウォレスの説に従って、自分の材料を配列して『種の起源』を書いたわけです。

それ以来、進化論というのは非常に大きな問題になるのですが、これがダーウィニズムと言われるものです。本当は、ウォレスに属するものです。しかし、ダーウィンの『種の起源』が出た時に、ウォレスはまだインドネシアの森の辺りにいましたから、そんなことはさらさら知ってはいないわけです。ですから、ウォレスというのは本当の科学者であって、本当の進化論の創始者なのです。ウォレスはなぜ進化論の原理につきあつたのか。彼はある種から変種を経て、新種になるところをとにかく上手く述べているわけです。その考えにダーウィンがなぜ到達しなかったか。ここでわたしの仮説をのべますと、ダーウィンは数学が嫌いで、数学をやらなかった。それで、牧師になる教育をさせられていたりしたわけです。ところが、ウォレスはダーウィンのように大学は出ていませんけども秀才で、あるケンブリッジ出の牧師さんがやっている学校の代用教員みたいなことをやっていたのです。ケンブリッジ出のその人は、数学をやった人で、数学を教えてくれた。それで、ウォレスは微分までやっているのです。無限級数の果てに微分があるのです。進化論を考えた時は微分なんて頭に無かったと思いますけれども、微分的発想があったからある種から新種に行くプロセスがぱっと見えたのではないか。ダーウィンには見えなかったのです。

ですから、ウォレスは本当に一何千種の新種を発見した植物学者、動物学者であり、博物学者であり、有名なロンボック島とバリ島の間ウォレス線を発見した世界最初の植物動物分布学を始めた人です。この科学者が、人間には靈魂が実在するのではないかという疑問に突き当たるん

です。そしてありとあらゆる実験をやるのです。それから、今度は巫女さんみたいな人がいますとすぐ自分の家に呼んで実験をやります。そして、ついに彼は人間の霊魂は死んでも残るという結論に達します。そうすると、すぐ「あいつは神がかかった」というわけで自然科学の世界は相手にしなくなります。ダーウィンは賢明だかなんとか知りませんが、決してそのようなことを口にしませんでしたので、最後まで偉大な科学者で終わりました。ウォレスは途中から心霊の研究をやります。

しかし、頭が衰えたわけではありません。彼が90歳のとき、いわゆるダーウィンの、いわゆるミッシング・リンク、人類と類人猿の間をつなぐような頭蓋骨がピルトダウンで発見されるという衝撃的な事件がおこりました。これはピルトダウン人と呼ばれまして、ティヤール・ド・シャルダンみたいな偉い人も皆ひっかかっているわけです。これで人類進化論の筋が見えた、と。ところが、ウォレス1人、90歳の人1人が当時の学会に対して、「そんなことない、あろうはずがない、それは嘘に決まっている」というようなことを発言しています。この前の戦争が終わってから炭素年代測定法等いろいろ古いものを査定する方法が発見されたので、その頭蓋骨は完全にインチキだとわかりました。

しかし、それを当時見抜いたのは90歳のウォレス一人なのです。最後まで、科学者としての目は全然狂っていなかったのです。何故彼は人間の霊魂という変な事までいったかといいますと、人間の脳の話なのです。脳は何十万年も前に完全にできているので、それが進化する、しないというのは問題にならないという結論に達しておったようです。それはこの前の戦争のおかげで証明されております。例えば、アフリカのジャングルの原住民は本当に幼稚でしようがないと思われていたのです。あるいは、オーストラリアの原住民、いずれもものすごく知能の低い人間だと思われていました。オーストラリア原住民など、「1、2、3、たくさん」としか数えられないとまで言われていたのです。これは第二次大戦後、人種的偏見が大幅になくなってきたから起ってきたわけですが、宣教師たちがアフリカのジャングルからわりと利口な子供をつれて、ローマのグレゴリオ大学などに連れて行くとトップの成績になるのです。それから、低い低いと思われていたオーストラリアの原住民でも子供の時から白人の教養ある世界に入れてやりますと、結構ハーバードなどに留学してストレートAの成績をとったりするわけです。これはウォレスの脳に対する仮説が完全に正しい事を証明しているわけです。人間の脳の発達は何十万年前かに完全に終わっていると。ただ、人間は環境によってどんどん文化として発達したところと、そのまま眠ったようになったところとがあったと。それが今の非常に文化が低いといわれる原住民も子供の時から白人の世界に連れてくれば白人と全然差がなくなるという唯一の説明になっているわけです。人間の脳というのは、ちょっと別なんじゃないかと。

私は専門が言語学なものですから、言語の理論を考えますと、言語発生論というのは様々なものがあると思うのですけれども、大部分の言語発生論者はおかしい。例えば、「ミツバチの言語」などというのです。ミツバチの言語というのはミツバチがダンスしますと、どこそこの方向に、何メートル先にミツがあるぞというようなことを伝達するらしい。それを言語と名づけるのです。そんなものは言語ではありません。伝達の方式です。例えば、ゴキブリの雄か雌かがフェロモンをだすと性の違ったゴキブリが押しかける。これは伝達ですが、ゴキブリの性ホルモンは言語か、なんていう阿呆な話になるのです。

人間の言語というものの定義ははっきりしています。これはかならず文節された言語である。かならず母音と子音が組み合わさって言葉を作っています。それから、ボキャブラリーは無限です。ダーウィンは、『Decent of Man』で、自分の知っている利口な犬は20くらい単語を理解することがで

きる、とそういうことの延長線上に人間の言語を考えました。ところがどんな動物をみても伝達できる信号の量というのは、せいぜいダーウィンの利口な犬くらいしかないわけです。20か30しかない。

ところが、人間の言葉はどんな言葉でもボキャブラリーは無限とっていいのです。しかもどんどんふえているのです。日本だって、万葉語、平安語、江戸語だとか現代語だとか、どんどん増えています。

世界中の言語が同じように増えています。だから、無限とっていいです。人間のボキャブラリーは無限。動物の伝達方法は、どんなに数えても20くらいか、おおくて50くらいかでしょう。完全に決まっているわけです。それから、音声と意味。これが人間の場合は決まっていけないのです。この机を机と呼ぼうがデスクと呼ぼうがかまわないです。ところが、動物は犬は悲しければ悲しいような泣き声しかでない。音と意味が切り離せないのです。そのarbitraryとていいますか、音声と意味の間に必然性がないのです。人間には無限の単語があり、音声と意味は恣意的なんです。そうしますと、ダーウィンは人間の言語と動物の言語の差は、程度差か、本質の差か、**difference in nature**か、**difference in degree**かと『人間の由来』のなかで論じて、「程度の差」としてはいますがそんなものではないのです。

彼は「動物の言語」と「人間の言語」の差は**degree**の差だと、程度の差だといっているわけです。

しかし、全ての動物は必ず文節された言葉を持っているか。これは持っているか持っていないかといえば、持っていないのです。動物の言語のボキャブラリーは有限か無限か、有限です。人間は無制限です。

これは、全く程度の差ではないのです。質の差です。音声と意味のくっつき方は、恣意的にできるかできないか。全く**degree**の差ではなくて、**nature**の差です。そうするとどこかで人間と動物が分かれたところがなくてはならないのです。そのようなところまでは推察できたのですが、わたしの素朴な推察に対して近頃のDNAの研究家は高等の類人猿と人間のDNAの違いは99パーセントくらいまで同じだと言っていました。ほとんど同じなのです。しかし、根本的に言語だけが徹底的に違っているのです。

私の親しい東京女子医大の児童心理学で知られる女性の先生が、チンパンジーの赤ちゃんは、1才か2才頃までは人間の赤ちゃんと比べてあまり差が無い、ところが人間の赤ちゃんが言語を覚えた途端、びゅうんと差がつくと。言語が人間だというのは確からしいのです。というのは、最近僕が西原先生のご文で感激しましたのは、人間はしゃべるところと食べるところが一緒になってきたという点です。動物は食べるほうだけにずっといくらしい。赤ちゃんも1歳くらいまでは、動物みたくらしい。ところが、人間はしゃべらなくてはならないものですから、とちゅうから咽喉で気道と食道が同じになるのだという説です。まさに人間と類人猿が一番違うところは、そこしかないと思ふのです。人間と類人猿の一番の差は言語です。言語及びその言語からくる差です。では、人間と類人猿はどこが一番違うかといえば、西原先生のご指摘の如く、それは人間の喉はしゃべれるように呼吸ができる。それは1才以後だとおっしゃっています。だから、赤ん坊はまだ進化が終わっていないので、西原先生のご名著、『「赤ちゃん」の進化学』にもかいてありますが、子供がしゃべりはじめると、その時、人間になる。そうしますと、進化論の考え方に新しい光がさしこみます。無機物の地球からわけのわからない生命が発生してそれが進化のプロセスをずっとやってきたわけです。その進化のプロセスは、定向進化論とかいろいろありますが、みんな途中で駄目になっているわけです。カレルの友人、ルコント・デュ・ニューイという人が進化論の本をこう書いています。進化は、

たとえて言えば生命の流れがほうぼうに分かれて、あっちの湖に入り、こっちの湖に入り、最後まで流れて、精神という海まで流れたのが人間だというような説明をしています。だから驚はある意味で人間にくらべて劣ってないわけです。空は飛べるし、目はよく利く。それは、生命の流れが湖に入ってしまったてそこはそれで完結しているという説明です。人間は海までいってしまった。海はなにかというと、精神があるところ。だから、高等なサルと人間の差はわずか喉にあった。他の差は全部程度の差とあってよい。この差がウォレスのいうように人間の脳の発達したときと、一致したのではないかと推定するわけです。密かに、言語論などを考えている時に、西原先生の本をお読みしまして、全くそうに違いないととにかく直感いたしました。そこしかないのです。

だから、西原先生の人間に対する医学の中心が喉・腸、その別れ具合のところに集中しているのは、私は非常に興味深いと思います。

私は生物学者でもありませんし、動物学者でもありませんけれども、進化論の歴史の主なる理論は全部知っているつもりです。ウォレスのリンネ学会のトランスアクションから始まりまして、他のリンネ学会で発表したものも、持っています。画期的だといわれた進化論の否定論も賛成論も大体主旨はわかっているつもりです。ところが、それは皆後で駄目になることがわかるのです。しきりにトカゲの尻尾を切って何回切ってもやはり尻尾は生えるなどと、愚かな実験をしたドイツのワイスマンという学者もいます。ところが、はじめてウォレス以来本物の進化論が出たというのが西原先生だと思います。進化論を実験したわけです。進化論を実験するという事はいままでは出来なかったわけです。今の科学の状況ではじめて出来るようになったわけです。だから、私はダーウィン以来とはあえていいません。ウォレス以来本物の進化論が出たと思います。西原先生は仰らないことですが、その進化論は、人間が出てその人間と動物の差、それは喉にある、脳にあると。そこから言語が出てきたのだらうと思うのです。

ですから、そこまで考えますとカレルが精神の世界について言ったこと、これは本当と考えてもいいわけです。無機の世界から生命が出来たくらいの大事件があったのではないか。生物の発達の極までいった人間のある時点から不滅の靈魂みたいなものがでたのではないか、それをカレルは確かめました。

ウォレスは実験に実験を重ねました。そして、そのうちウォレスはこういうことに気づくのです。いろいろ霊を呼び出したりしますが、死んだ霊で、人間と接触をもっているのはそんなにたいしたことない、つまらないと言うのです。偉い霊は人間界を去ったあと、わざわざ帰ってきて幽霊みたいにあらわれはしない、あらわれるのは皆つまらない霊だとそういう結論までいっています。

そうしましたらこういうことがあります。私は自分も年を取ったものですから、年をとって健康で知的な活動をしている方に興味がありまして、そういう方たちと対談する機会を出版社の方に作って頂きました。三石巖先生、それから、漢字の白川静先生、そして、去年は塩谷信男先生と言う方と対談させて頂きました。来月か今月対談が本になるかと思えます〔『人間百歳自由自在』致知出版社、2003〕。

この塩谷先生は東大医学部にお入りになったのですけれども、当時の唯物的な医学以外の治療法をやったものですから、ご自分の専門の真鍋嘉一郎教授（夏目漱石の主治医だった人です）その人に怒られます。京城帝大の助教授もなさっておられ、学問的にも非常に優れた人だと思えますが、とにかく、東大から追われて、開業医になられた。そして、人間にとって一番重要なのは、呼吸ということを知られまして、それを根本にしておられました。彼自身は霊的な力がありました。それで、渋谷で医院を開かれまして、日本で一番はやるお医者さん、東京の開業医で運転手つきの自家用車

をもった最初のお医者さんと言われます。この人がまたよく治すので、後になって真鍋教授も、「私は塩谷を弟子にもったことを誇りに思う」というところまでいったようです。この人は、75歳の時に、ヒマラヤトレッキングを朝日新聞主催でやりました。当時ヒマラヤにのぼるのは皆若い人ばかりで、参加を断られたりもしたのですが行きました。結局高山病にならなかったのは75歳のその塩谷先生だけでした。90歳になっても、ゴルフでエイジシュートを何度も達成しています。去年は2月頃、伊東でゴルフコンペがありまして100歳の塩谷先生が1位なのです。

先生がおっしゃるように、医学と言うのは中世の諺でも、3人医者がいれば2人は唯物論者といわれるくらい唯物的になるだろうと言われていました。中世の西洋でもです。しかし、塩谷先生もやはり霊はあるとおっしゃいます。しかも、全くカレルに関係ないけれども遠くで祈って治るものがあるというのを実例をもって突き止めておられるのです。しかし、85歳頃、開業をやめられたのですが、それくらいになりますと、もう霊を呼び出すのはいやだといいます。なぜかと、呼び出されてでてくる霊はろくなものじゃない、たいしたものじゃないという。ウォレスと同じ事をいっています。でも、先生とお話したらウォレスのことはぜんぜんご存知ありませんでした。偶然同じ結論に達しておられたのです。それで、この先生も呼吸を非常に重視されるのです。毎朝100歳になられても、冷水浴をなさったりしておられたようです。それから腹式呼吸です。横隔膜を動かすのは非常に重要であるといっています。この先生の説によると、まず腸にいいのです。先生のやり方の腹式呼吸でやりますと、腸に新鮮な血液がたくさんいき、その血液が体をよく廻って、呼吸もしていますから酸素も沢山は回っていますし、肝臓に血液が廻って肝臓でつくった糖が脳に行くから最後まで呆けないという事です。

私がお会いしたのは100歳を過ぎてからですが、昔の話しても日付も固有名詞も全然忘れておられない。だから理論どおりいい血が頭にまわっておられたのです。それから、腹式呼吸をやりますと排泄が非常にいいです。横隔膜を、ぐっと押すものですから血液が腸に行くのみならず腸にたまらないようです。きっちりです。

西原先生は今そまでおっしゃっていないけれども、そういうことで進化の極までみていきますと無機物から生命が発達したようなかんじで異質なものがでてくる。それが靈魂みたいなものではないか、と考えております。

進化論の歴史からみて、西原先生はウォレス以来です。振り返って見ますと、ウォレスから西原先生まで、他はダーウィンを含めても理論的にはたいしたことはない。だから、私は西原先生の本が早く英語で次々に出ることを期待します。そうなりましたら、進化論の本場と言いますとイギリスのようですけれども、それが日本になる日も遠い将来ではないと思っている次第でございます。素人のお話で大変失礼いたしました。